

NYの恋人

palareru

「うう・・・寒い・・・」、

学校から出た僕にビル風が
まとわりつく。

東京から持って来たお気に入りの
もこもこショールをぐるぐるっぐるっと
首に巻き付けてレッスンバッグを抱き
抱えた。

「ひとり?・・・」、

のどぼとけを隠した僕に声を掛ける
ピアスだらけの男。

そう言えば、駅のホームでもよくこうして
声を掛けられたっけ・・・

いつも黒い服に深めのキャップ。
そしてもこもこのこのショール。

「一緒に飲みに行きませんか?」、

割と真面目そうなサラリーマンが多くて
声を荒げるのも・・・って、思ってる

「俺の連れになにか?」、

グイッと抱き寄せてそう言ってくれたのは
彼だった。

待ち合わせの駅に、急いできたんだよね
いつも
そう、いつも冷静そうに人払いをしながら
その息は、荒れていて。

そんな事を思い出していると

「なあ、一人ならこの後・・・」、

目の前のピアスだらけの男は、少し苛立ち
ながら僕の肩を掴んだ。

「俺のハニーに何か用か？」、

そのピアス君が固まるのも無理はなくて
僕の後ろには、2 mに近いその身体を揺ら
しゆっくりと近づいてくる姿。

「い・いや・・・道を・・・道を聞いたただけだ」、

ゆっくりと後ずさるピアス君は、手を挙げて
逃げ出した。

「ンもう・・・」、

僕がくるっと振り返ると

「ホントに道を聞かれたのか？」、

ふわりとその胸の中に引き寄せられた。

「ん～行先はまだ聞いてなかったけどね」

くすくす笑いながらそう答えると

「それをナンパって言うんだ・・・」、

つんと僕のオデコを突いて優しく笑う。

エスコートされて歩き出す僕の横には
今は、この優しい彼がいる。

ゆっくりと闇に包まれようとするこの街に
また、この季節が来たよ。

そっと見上げた空は、冷たい息を白く
しながら眠らないネオンに輝く。

「買い物していくか?」、

アメフトで鍛えたその腕に、僕のバッグを
軽々とひっかけてニッコリ笑うその姿に

「今日は鍋にしようか・・・」、

貴方の優しい笑顔を思いだす。

「何、ニヤついでる?」、

そんな僕を嬉しそうに見つめて

「早く部屋に帰りたいのか?」、

ちょっと厭らしくウインクをして見せるから

「ば・・ばか!!」、

思わず蹴りを入れて駆け出した。

「そんなに照れなくてもさあ〜」、

後ろを追いかけてくる彼が、ふわりと僕の
肩を抱き寄せた。

「そう言えばさ、K行かないのか？」、

僕の名前をそう呼ぶのは、京介の発音が
言いづらいかららしく

何度も言い直しているうちにK（ケイ）に
落ち着いた。

こっちではニックネームは珍しくないから
いつのまにか僕はKと呼ばれている。

まるで別人のような気がして・・・

気に入っているんだけどね、でも

「まお・・・」、

優しくそう僕を呼ぶ貴方の声がいつも僕を
包んでいるんだ。

そんな僕に、彼は優しく

「K・・・」、

僕を呼ぶ。

「ん、何のはなしだったっけ？・・・」、

ストライドの長い彼の横を小走りに追いつき
きょとんと首を傾げると

「来月の日本研修にさ・・・」、

少し寒そうに襟を立ててそう聞いた彼。

「行かないよ!」、

ニッコリ笑って答えると

「そっか・・・」、

彼はその続きを呑み込んだ。

「何を買うの?・・・」、

信号待ちで止まって見上げると

「ん～まだ考えてなかった!」、

大げさに手を広げて肩をすくめ

「なんだよそれ!」、

青に変わった人の流れに飲まれながら
そっと手を繋いだ。

「またはくれるぞ!」、

ぐいっと引き寄せられて、僕達はまたくすくすっと笑った。

「じゃあ、今日はジャパニーズ鍋だな」、

その言葉に、僕はこくんっと頷いた。

僕達の暮らすアパートメントまで学校から
バスで3駅。

先輩が譲ってくれた格安物件にこの夏に、
引っ越した。

窓を開けると何とも言えない色合いの街並み。

時々、煙草をふかしたお姉さんが窓越しに
ウインクをくれたりする。

でも、その町の人達は皆いい人ばかりで、その
街で育った彼はいつでも人気物だ。

「日本食なら、少し脚を伸ばしてシティまで」

彼はいつもと違うバス停に向かう。

「いいよ、いつもの店で・・・」、

繋いでいた手をくいと引っ張った僕に

「こん・・・たく？ないぞ・・・」、

ちょっと不機嫌な顔で立ち止まり

「こんにゃく？・・・」、

聞き返した僕に、苦笑いをしながら
頭を掻いた。

「いいんだ、いつもの僕達の店で・・・」、

僕がそう言うと

「オッケー」、

彼はいつものバス停に向かった。

2度目の冬。4

「今日は何を買うんだい？」、

路地に並ぶ小さな店には彼と同じ肌の色をした人達が溢れている。

いつも、目立つ僕をそっと抱きしめるように守ってくれる彼は

「ジャパニーズ鍋！」、

僕が二人・いや三人分くらいの大きなお腹のおじさんのお店で野菜を指さす。

「NABE？」、

わからない？っと大げさなりアクションでお道化るおじさんと彼はパンチングをしてじゃれている。

その横で僕は野菜をおばさんに手渡して

「毎回、あきないよね・・・」、

くすくすと笑うと

「今夜は、ジンジャーは？」、

袋を手渡ししながら聞いてくるその手には小さなショウガ。

「うん、ありがとう・・・あとハチミツが
終りそうなんだ、又探してくれる？」、

そう言いかけると

「ほら、取り寄せてあるよ・・・」、

おばさんは棚からハチミツの瓶を出した。

懐かしい日本の文字が並ぶ、

彼が好きだったあのハチミツ。

「ありがとう・・・」、

俯いた僕の頭を優しく撫でたおばさんは

「いつでもおいで・・・」、

僕の目元の涙をそっと隠してくれた。

「ほら、いつまでジャレてんだ！荷物を
持ちなよ！」、

いつの間にか沢山の人ばかりになってた
彼の背中に声を掛けたおばさんは

「ほら、これおまけだよ」、

そう言って、いちごジャムの瓶を手に乗せた。

「ありがとう。。」、

汗だくの彼に買い物袋を渡して僕らはその
商店街から通りへと歩き出す。

「今日は、ハチミツが売れる日だね・・・」、

僕の背中を見つめるおばさんが、小さく
つぶやいていた。

「ふう～汗が冷えてきた！」、

寒そうに背中を丸める大きなその姿。

彼に出会ったのは、まだ僕がこの学校に
来たばかりの頃だった。

「なあ、ホントに男？」、

東洋人が増えたとはいえ、僕のような中性的な
男子は珍しいようで、至る所で聞こえるよう
にわざと、そんな声を掛けられていた。

数日のオリエンテーションが終わり、やっと
教室の仲間と数人会話が出来るようになった
少し肌寒むかったあの日、僕は大ちゃんとの
約束を破って、大きく襟元の開いたシャツを
着て学校に行ったんだ。

黒髪に、白い肌。

人目を引いたのは間違いなく、仲良くなった
仲間も、綺麗な肌だね・・・と、声をかけた。

そんな時、クラスメイトのlineが一斉になった。

もちろん僕のも。

そこに映し出されたのは、僕の大事な人の横顔。

そしてそれを受け止める僕。

一分に満たない動画は、暗闇の中愛し合う僕達
あの映画の一部で、

「日本の俳優って、こっちの俳優なんだ〜」、

クラスでもかなり目立ったグループから歓喜の
声が上がった。

もちろん送信者は、その中でひととき目立つ男。

青い目をしているのに、髪を黒く染め僕を意識
している事は、少し前からわかっていた。

「なあ、これ本番？」、

あっという間にそのグループが僕らを囲む。

仲間は、ごめんと声を掛けると席を離れた。

「この学校にも、こっちで入ったの？」、

きつい匂いの取り巻きの娘が胸をよせて

「こいつは女に興味ないんじゃないかね？」、

ゲラゲラと大きな笑いが起きた。

上手く聞き取れない単語が飛び交うけど
いい事を言われていないのはわかる。

でも、ここでひるむわけにいかない僕は
じっと中心の彼を見つめた。

「そう言えばさあ・・・」、

僕の視線を楽しそうに受け止めながら、
そいつは言った。

「次の授業はデッサンだったよなあ～」、

周りのクラスメイト達に視線を写しゆっくり
教室を見渡す。

「確か、仲間を選んで書くんだっけ?」、

今度は、僕を見て

「お友達の印に、今日は彼にモデルになって
貰おうぜ!」、

ぐいっと僕の腕を掴むとそこに立ち上がらせ

「俳優さんの引き締まった体をほら・・・」、

真ん中にあるスツールを指さして

「みんなが待ってるぞ、早く脱げよ!」、

その言葉に、僕は周囲を見渡すと仲間は視線を
反らした。

これで僕の居場所はなくなるのかな・・・

そんな事を思いながらも僕はその台に
足を掛けた。

ヒュー！

学校とは思えない野次や口笛が飛び交う
中、僕は大きく開いた襟元の下ボタンに
右手を向けた。

「どこまで脱がす気だ？」、

教室の後ろ、数人のグループから声が
した。

仲間達の噂で、black・・・そう呼ばれている
彼等は、アメフトチームにも入っている様な
大柄な体格で

ガタガタと音を立てて机と椅子を蹴散らして
あっという間に僕らを取り囲んだ。

僕の手は震えていた。

「なんだよ、お前達もお友達になりたいのか？」、

その声と同時に、一番大きな奴が僕のシャツに
手を掛けた。

大ちゃん！・・・

ギュッと目をつぶり、引き裂かれるだろう
シャツのボタンを掴んだ、その時

ふわり・・・

まるで羽が生えたかのように、僕はその
手に抱き上げられて彼の腕の中へと着地
した。

「おい！ 抜け駆けする気か？」、

「ふざけんなよ！」、

などと、僕のわからない速さで言葉が飛び
かっていたらしいが、僕にはさっぱり聞き
とれなくて、むしろその腕の中で安心する
彼の心音を聞いていた。

「こいつが、J先輩のお気に入りだと知って
いるのか？」

その一言で、静かになった教室。

やっとその腕の中から解放された僕を、
みんなが見ている。

「J?・・・」、

キョトンと見上げた僕に

「ジェームズ先輩を知ってるだろう？」、

僕を助けた彼がそう言った。

「あ、うん、昨日も食事に行ったけど？」、

そう答えた瞬間、教室の空気が凍った。

「さっきの事、黙ってて欲しいか？」、

ニヤリと笑って奴らを見た彼に

「も・もうしないよ！」、

そのグループはバラバラと逃げ出した。

意味がわからない僕に

「お前の警護を任されてる・・・」、

そう言って大きな手を僕の前に出した。

「警護？・・・」、

更に意味の分からない僕の手を勝手に掴み
ぶんぶんっと握手をして

「Macだ！」、

真っ白な歯を見せて彼は笑ったんだ。

「妹が大まおの大ファンなんだ!」、

入学式の帰り道、僕は呼び止められた。

僕の大好きな彼が青き制服に身を包んだ
DVDを持って、そこにサインを頼むと
上級生の教室へ向かう階段でそう言われ
僕はなんだかくすぐったくて、

「妹さんのお名前は?」、

ゆっくりと

不慣れな英語を選んでそう聞いた。

その人は、眉をだらしなく下げて笑い
僕に判る様に、ゆっくりとスペルを言い
そして本当に嬉しそうに笑った。

それから、バス停で挨拶をしたり・・・

先週は、日本食のお店を教えて貰って
昨日はパスタのお店に食事に連れてって
貰ったばかりだった。

どうやら彼、ジェームズさんはこの学校
では色々と問題のある方のようで・・・

やっと仲良くなった仲間も、肩をすくめ

僕を不思議そうに見ている。

これも、ある意味僕の居場所はないの
かもしれないな。

そう、小さなため息が漏れた時

「彼は先輩の妹さんの憧れの人なんだと」、

目の前のMacが大きな声を出した。

驚くクラスメイト達。

「それだけで、彼には全く問題は無い、
ただ、俺は、彼を守るだけだ。」

Macはそう言うとかラスの後ろの仲間の
処へと戻って行った。

呆然とする僕の処には、

「ごめんね・・・」、

「驚いたよ!」、

次々にクラスメイトが集まってきて、
先輩やら日本の俳優の話しやらですっかり
盛り上がったんだ。

入口に逃げていた奴らがちらちらと僕を
見るから

「宜しく・・・」、

近寄って右手を出すと

「悪かった・・・」、

青い目の彼は、少し俯いてでも嬉しそうに
僕の手を握った。

ゴホン！！

瞬間、後ろから大きな咳払いが聞こえて
青い目の彼は慌ててその手を離した。

僕が、クスクス笑うと釣られてみんなも
クスクスと笑った。

そんな事を思い出しながら信号待ちをしていると、彼がじっと僕を見た。

「何、ニヤニヤしてるんだ？」、

そう聞かれて

「な。なんでもないよ！」、

ぶんぶんっと手を振ると

「なんか言えない事でも考えてたのか？」、

ニヤニヤと、口元を緩めて笑い乍ら

「そうだ、ドラッグストアに寄らなくちゃ」、

急に向きを変えた。

「なに？、何かいるの？・・・」、

その後を追いかけてながらそう聞くと

「無いだろ・・・あれ・・・」、

ニヤリと、ウインクをして僕を見つめて

「いろいろ買っちゃうか?・・・」、

ツンッと僕のオデコをつついた。

「ば・・・ばかああ!!」、

人込みの中でふざける彼に、思いっきり
赤面している僕。

通り過ぎる人達が優しく道を譲ってくれた夜
だった。

駅のホームで酔っ払いが声を掛けている。

可愛そうに、今にも泣き出しそうな女性に、そっと身体を割り入れて青年がその手を取った。

懐かしいな・・・

待ち合わせると、いつもナンパされてたアイツ。

優しいから声を荒げることもせずに、そっと視線を逸らして逃げてたっけ。

だからいつも必死に走ってその間に俺の身体を入れて

「俺の連れになにか？」、

冷静にそう言うのが俺の役目だった。

もこもこのショールは、今もその襟元に巻き付いているのかな・・・

少し寒くなった夕暮れの空を見上げて、寒さに弱いアイツにそっと声を掛ける。

「元気か・・・」、

何も聞こえない街は、いつもと変わらない
暗闇へと落ちていく。

お互いの未来に向かおう・・・

そう決めたあの夏。

そして、覚悟を決めた秋。

しっかりと自分の世界に幕を下ろし次の
ステップへと向かったアイツ。

旅立ったあの季節がまたやって来た。

変わっていないかな・・・

いや、変わっているはずだ。

俺も、少しずつ成長しているのだから。

そう、俺の世界も変わったんだ・・・

交わることの無いこの時間。

停まる事の無いこの世界。

アイツが大きな夢をかなえる為に
俺は、自分の道を突き進むと決めた。

あれから、2度目の冬だよ・・・まお。

背中に感じる熱い想い。

折れるほど抱きしめられて、僕は今
ふわりふわりと揺れている。

時々越えられない波を送りながら・・・

優しく激しく僕を愛する彼に背中を
預けたまま

僕は涙を流す。

見えないように頬に手を伸ばせば、
キツクその腕を掴まれて

泣かないで・・・

そう僕に伝えるように首筋に甘く
キスをした。

深く深く戻れない闇に落ちていく。

「大輔さん、お久しぶりです」、

今度の仕事は、またアイツとの仕事。

「また、よろしくな・・・」、

解していた体が何故か強張る。

「最近、込み合ってるみたいですけど
逢いに行っていないんですか？」、

大きな瞳で、真っ直ぐに俺の心を抉る。

「誰の事だよ・・・」、

立ち上がり背中を向けた俺。

「まさか、引っ越したの知ってますよね？」

グイッと捕まれた腕を、ゆっくりと解き

「この間、圭ちゃんに聞いたよ」、

ニッコリ笑って答えてみせると

「俺・・・許しませんよ・・・アイツを泣かせたりしたら・・・」、

俺のシャツの胸元を締め上げた。

ざわつく稽古場、視線が俺達に集まっている。

「は～い、スイッチ入りました!」、

ワザトお道化て、肩を組み皆さんに声をあげ
歩き出せば

「あ、はい!」、

釣られて一緒に笑顔を見せた。

「許しません・・・」、

ニッコリ笑ったまま、俺の肩をするりと
抜けた琢磨は俺を冷たく射った。

アパートメントへの角を曲がると、ビル風が僕のキャップを吹き飛ばした。

背の高い彼は、それを軽々とキャッチして僕へと差し出す。

「ありがとう・・・」、

ぎゅっとそのキャップを抱きしめると

「それ大事なんだろう?」、

僕の返事を聞かずに彼は歩き出した。

そう・・・

これはあの人のだから・・・

腕の中にギュッと抱きしめたまま僕は彼の後を追いかけた。

「おかえり!」、

入口ですれ違う隣人に挨拶をして

「ただいま・・・」、

僕達の部屋へと続く階段を駆け上がった。

「ふう・・・寒い・・・」、

僕の部屋の前で立ち止まった彼はゆっくりと
振り返り

「シャワーして、すっきりしたら来るよ・・・」、

ぽんっと僕の頭に手を置いてニヤリと笑う。

「ば・・・ばか・・・」、

その意味を先読みしてしまった僕は真っ赤に
なってしまう。

「ほら、これ・・・」、

ニヤニヤしたままの彼の手から渡された袋は
お鍋の材料と、ドラッグストアの銀色の箱。

「ゆっくり楽しんで準備しな・・・」、

投げキッスをして彼は隣の部屋へと向かった。

部屋に入る彼を見届けて僕は自分の部屋の
ドアへと向きを変えた。

硬くて冷たくてところどころへこんでいる
無機質のドア。

錆びた緑色のその視線の先に、無造作に
ブロンズの数字が張り付けられている。

「ボロいけど、結構広いんだぞ」、

そう言って先輩に連れて来られたこの建物。
外観を見て、階段を登っている時は断る理由
を探していた。

でも、

「ここだよ・・・」、

そう言って先輩が指さした部屋のドアを見て
僕はそっとその数字に手を伸ばした。

「ここにします・・・」、

そう言ってドアにゆっくりともたれた僕を
先輩は不思議そうに見つめていた。

少し曲がったその数字は

あの木製のドアではないけれど、僕の中で
とても大事な部屋だから。

左手に荷物を持ったままそっと右手でその
数字に触れると

カシャン・・・

人差し指に絡めていた鍵が床へと落ちた。

慌ててしゃがんでそのキーリングを拾いあげ
鈴音をさせて圭ちゃんがくれた大仏が揺れる。

「よかった、割れてない・・・」、

揺れる大仏は、僕がこの街へ来る前にくれた
んだ。

「いつでもそばに居るからね・・・」、

そう言ってニッコリ笑って僕の肩を抱きしめ
てくれた圭ちゃん。

夏の終わりに、こっそりと遊びに来てくれて

「引っ越すことにしたんだ・・・」、

段ボールに詰めた荷物を前に正直に話した。

「そっか・・・」、

ただそれだけを呟いて、圭ちゃんは一晩だけ

僕と過ごして帰って行った。

チャリン・・・

そこに揺れる3つのカギ。

ひとつは、この部屋のカギ。

もうひとつは、学校のロッカーのカギ。

そして、今指になじんでいるこの鍵は・・・

もう2度と使う事の無いあの部屋のカギだった。

ギュッと鍵を握り締め、そのままそこにしゃがみ込んでいた僕に

「大丈夫?・・・」、

柔らかな声を掛けられた。

ふっと顔を上げると同じフロアーに住むレイチェルが心配そうに僕の横で覗き込んでいた。

「何でもないよ・・・鍵を落としちゃって・・・」、

慌ててそのカギを揺らしてみせると、レイチェルの視線が、そのカギじゃないところに固まった。

へ・・・

ゆっくりとその視線の先へと僕の顔が動く。

ああああ！！

左手の買い物袋と一緒に握り締めていたその箱は、もろその形が印刷されてて・・・
もちろん大きく名前も書いてる訳で・・・

「いや、あのこれは僕が使うんじゃ・・・」、

慌てた僕の言葉に、今度はレイチェルの瞳が

大きく開いて僕を見た。

「え？・・・」、

「あ、そうよね、うん！それはとっても
大事な事よ！うん、むしろ絶対に必要よ！」、

「あ・・・いや、そのあのね・・・」、

「大丈夫！うん、頑張って！」、

レイチェルは後ずさりながら親指を立てて
ウイंकをすると自分の部屋へと消えた。

「これで最後ですか？」、

そう声を掛けられて俺は部屋を見渡した。

「カーテンと絨毯はどうします？」、

立ち会っていた不動産屋がベランダから
部屋に入ってくる。

「すみません、処分してもらっても・・・」、

絨毯の小さなシミを見つめながらそう言う

「いいですよ、まとめて処分しておきます。」

書類に書き込みながら不動産屋は部屋の中を
チェックする。

「じゃあ、私達はトラックで先に向かいます」、

引っ越し業者が、声を掛けて出て行った。

がらんとした部屋。

思い出が詰まったこの部屋を出る。

「ここにサインをお願いします」、

不動産屋が玄関先で書類を差し出した。

ゆっくりとフルネームを書き終わると

「さあ、あちらへ行きますか！
あの部屋なら広いし明るいし、お子さんが
何人増えても大丈夫ですよ～」、

そう言って靴を履いて廊下へ出た。

何もない玄関にぽつんと残った俺の靴。

ゆっくりとその靴に脚を入れ

そっと振り返る。

「おかえり、大ちゃん！」、

ふわりと俺の首にお前が抱きついた気がして
思わず空気を抱きしめた。

「行きますよ、渡辺さん？・・・」、

そう声を掛けられて

「はい・・・」、

俺は、その手を扉へと移した。

「あ、鍵なんですけど、スペアがひとつ・・・」、

バタンっと閉まったドアに鍵をかけて不動産屋
にそう言うと

「あ～それもう使えませんかからいいですよ」、

俺から受け取った鍵は無造作に彼のポケット
の中へ消えた。

もう、この部屋の中へは2度と入る事はないん
だと、そのドアを見つめた。

新しいマンションの前に着くと、トラックが既に扉を開けて待っていた。

「平日は引っ越しが少なくて楽ですよ」、

不動産屋はニッコリ笑って車を停めた。

新築のそのマンションを見上げていると

「大輔・・・」、

柔らかな声が俺の腕を掴んだ。

「大輔さんは、この休みはどうするんですか？」、

着替えをしながら琢磨が聞いて来た。

「引っ越し・・・」、

そっけなく答えた俺に

「どこへ?・・・」、

驚いた琢磨が大きな瞳で俺を見つめた。

「一駅動くだけだよ・・・」、

荷物を掴んで背中を向けると

「知ってるんですよね。アイツ・・・」、

俺は何も答えずに稽古場を出た。

昼めし食べてると、間に合わないな・・・

俺は引っ越し業者との待ち合わせの時間を携帯で確認して、歩き出す。

今度の部屋には、あのカーテンは合わない
よな・・・

二人でカーテンを選んだショップが、電車の
窓越しに流れて行った。

熱い・・・

熱くて、そして甘くて・・・

自分の中でうねる指が、何度も僕をひくつかせている。

もう・・・だめ・・・

欲しい・・・

僕の腰を抑え込んで、そこを甘噛みする
その瞳に訴える。

「ひとつになって・・・いい?・・・」、

ゆっくりと身体を動かしたその瞳が僕を
しっとり食べていく。

「は・・・やく・・・」、

必死に伸ばしたその腕を、きつく掴み、
押さえつけて

「やっぱり外していいか・・・」、

高ぶりにつけていた薄いゴムを取りさった。

踊っていた指が、大きく曲がりわざとその
中を虐めて逃げ

ぐう・・・

引き裂かれそうな圧迫感に身体がしなる。

力を抜けと、何度も何度も耳元で舌を遊ばせ
その熱を奥深くまで押し込むと

「もう我慢できない・・・」、

声も出無い程、僕は激しく突き上げられた。

ズキン・・・

背中で動いたそれが僕の中で大きくなる。

ん・・・

動こうとしてもその腕の中に抱きしめられていて動けない。

部屋の中は暗くて、薄いカーテンから隣のビルのネオンが光る。

意地悪く、その熱を少しづつ動かして僕の胸に指を遊ばせる。

「ごめん・・・僕・・・飛んじゃったね・・・」、

首だけを動かして、僕の頬にその唇を受ける。

「いいさ、ちょっと激しすぎたんだろ？」、

嬉しそうなその声に

「ちょっとじゃ、ないし・・・」、

すりすり脚を絡める。

「じゃあ、優しくするからさ・・・」、

ぐんっと跳ねたその熱に

「や・・・だめ・・・お鍋の用意・・・」、

逃げた腰は直ぐに捕まえられて、奥へ深くへ進んでくる。

「お前がもっと食べたい・・・」、

その甘い声に僕の中は波打って行く。

「大輔・・・」、

その柔らかな声の主が、ニッコリと笑う。

「お手伝いに来ちゃった・・・」、

嬉しそうに笑うその横には、父さんまで。

「俺、時間言ってなかったよな・・・」、

腕に絡まっていた母さんの手をそっと握り
しめて二人を見つめると

「だって、こうでもしないと大輔は頼って
くれないし、ね・・・お父さん・・・」、

「そうだよ、せっかく休みなのに一人じゃ
大変だろ？」、

楽しそうな二人に

「今は、殆ど業者がしてくれるんだよ、
むしろ二人がウロウロした方が邪魔になる
から、いいよ・・・」、

俺がパタパタしている業者を指さすと

「せっかく来たんだから、甘えなさい!」、

「そうだぞ、ほら差し入れも・・・」、

父さんは俺の手にその袋を渡した。

「・・・ありがとう・・・」、

張り詰めていた心が悲鳴を上げて二人に
溢れる涙を見せた。

「私達はいつでも貴方の為に居るんだから」

頷く父さんと、ニッコリ笑う母さんをぎゅっと
抱きしめた。

うっすらと部屋の中が明るくなる。

頬にあたる息が心地よい朝。

軽く擦り切れた感覚の胸とジンジンと痛む
愛の証。

狭いシングルベッドから落ちそうな僕の横の床
には銀色の切れ端が散乱して、ゴミ箱に入り
損ねた白い熱が、無造作に転がっている。

獣のように、求めて与えられ、
どこまで高みを越えても足らなくて・・・

もっともっと・・・

そう言い続けた自分を思い出して頬がカーっ
と熱くなる。

疲れ果てたはずの、隣人のシーツの中身が
軽く起き上がり僕の腿をくすぐっている。

ふふふ・・・

幸せを噛みしめながら、今の時間をそっと
確認しようとベッドヘッドに手を伸ばすと

ふわり・・

掴んだ携帯を取り上げられて

「邪魔だったから、電源落とした・・」、

そう言ってそれを床に落とした。

「そろそろ、朝ごはんを食べてもいい？」、

鼻がくっつくほど僕の目を見つめて

朝の高ぶりは、硬く動いている。

「好きなだけ・・」、

直ぐに塞がれた僕の唇は、あっという間に
甘い声を上げる。

「愛してる・・・」、

「僕も、愛してるよ・・・」、

「大輔が甘えてくれたのは久しぶりね」、

引っ越し業者の書類にサインを終えた母さんが、ニッコリ笑う。

「そうだな・・・いつも頑張り過ぎて心配だったからな・・・」、

新しいカーテンを取り付けながら父さんも嬉しそうに笑う。

「ねえ？あのベッド大きいし、今夜はここに泊まっちゃおうか？」、

子供みたいにベッドで跳ねる母さんの言葉に

「まずは、夕飯だな！」、

父さんも楽しそうに返事をした。

真っ暗な空を見上げた、二人の上には、満天の星空。

そして飛行機が横ぎっていく。

「見て・・・」、

指さす母さんの肩を、ふわりと父さんの手が
優しく引き寄せた。

「流石に寒いな・・・」、

床に落ちた毛布を器用に足で引っ張り
あげて笑う姿に

「そう？僕はとっても暖かい・・・」、

ぎゅっとその胸にしがみつく。

「おいおい・・・もう無理だぞ・・・」、

ちゅっとキスをしながら苦笑いのその
髪に指を絡めて

「僕も、無理・・・」、

クスクスと二人で笑う。

「今日はどうする？・・・」、

「このままゴロゴロしていたいけどな・・・」、

「ん～・・・それは無理かも・・・」、

「だよな・・・じゃあ、とりあえず風呂？」、

「そうだね、その後は朝食だね・・・」、

しっかりと抱き合いながら起き上がった僕等の

視線の先には、

朝日に光る、2つの瓶。

「はちみつたっぷりのホットケーキが食べたい」、

ちゅっとその唇に甘えると

「ジャムも添えてな・・・」、

お返しのキスをして僕を抱き上げた。

「愛してるよ・・・」、

「愛してる・・・」、

光がしっかりと貴方の顔を写し出していた。

「Kってさ・・・結構凄いんだな・・・」、

Macの言葉に、一気に顔が赤くなる。

出かける準備をしていた僕の携帯に
そんな事を言うから

「な・・・何言ってるの?・・・」、

僕は恥ずかしくて、隣の壁を思いっきり
蹴った。

「ふふふ・・・可愛いなあ～」、

まだ、そんな事を言うから

「んもう、やっぱり出かけない!」、

僕は通話をプチッと切る。

本当は、歩くのだってやっとだし・・・

それに、まだ思い出すと身体が熱くなる。

こんな状態でMacとお出かけなんて・・

また、ドキドキと胸が鳴り始める。

どうしよう・・・

抑えきれなくてしゃがみ込んでいると

「どうした？・・・」、

ふわりと抱きしめられた。

「な・なんでもないから・・」、

その手から抜け出ようと慌てると

「もしかして・・また？・・」、

ニヤリと嬉しそうにわらったその腕で
僕は、あっさりと抱き上げられた。

「お出かけはやっぱり延期だな・・・」、

着替えたばかりのシャツのボタンを、その指が
楽しそうに外して行った。

「夕飯は何が食べたい? . . .」、

そう聞きながら、僕はドアのカギを探す。

いつも、テーブルの上に置いてあるはずの
キーリングが無い。

「探し物はこれか? . . .」、

そう言ってその綺麗な指先に揺れるのは
僕の部屋のキーリング。

「ありが . . .」、

受け取ったそのリングには、鍵が . . .

「俺の部屋の鍵 . . .」、

揺れる鍵が4本に増えている。

「いつでもおいで . . .」、

ふわりと僕を抱き締めて

「愛してる・・・まお・・・」、

貴方は、優しいキスをくれた。

今、目の前の巨体が腰を抜かして廊下に座り込んでいる。

「え？・・・は？・・・」、

僕と大ちゃんを交互に見て、そして後ろのレイチェルを見て・・・

「初めまして・・・レイチェルです」、

さすが、あの箱で察していたレイチェルは全く動じることもなく、逆に大ちゃんのオーラに頬を染めている。

「駄目だからね・・・僕のなんだから・・・」、

レイチェルの耳にそっと牽制球を投げると

「わかってるわよ！、あんな声聞いちゃっ・・・」、

レイチェルはしまった！ってその口を押えた。

「ま・・・まさか・・・」、

僕が、よろっと砕けると

「きこえちゃった？」、

大ちゃんは僕を抱き締めて

ちゅ！

二人の前で、唇を重ね・・・

重ね・・・

くった～・・・っと、僕がその胸に倒れる
まで、甘いキスをされてしまった。

「宜しくMac、いつもマオがお世話になっ
てます。これからも宜しく・・・」、

僕をしっかりと抱きしめたまま、座り込んでいる
Macに右手を向けた。

もしかして・・・

大ちゃん、ヤキモチ焼いてたの？

僕が、大ちゃんを見つめると

「こいつは、俺のだから・・・」、

Macの大きな手を、思いっきり握った。

昨日、突然学校にやって来た大ちゃん。

午後の授業があった僕は、スペアキーを渡して
時差ボケの大ちゃんに、部屋で休んでいて・・・

そう言ったんだ。

余りにも、上の空の僕を心配するMacに

「東京から、大好きな人が来ちゃった・・・」、

そうこっそり教えて

「わお！、じゃあ今夜は一緒に夕飯食おうぜ」、

僕の肩を抱きしめて、一緒に喜んでくれた。

不慣れな僕の為にいつも、僕を守り支えてくれて
いるMacの話は、毎日のように大ちゃんにして
いるから、大ちゃんもきっと喜んでくれるはず。

そう思っていたんだけど・・・

いつもの癖で、僕の横に並ぼうとするMacとそれを阻止しようと、僕の手をひっぱったり、時に抱きしめたり・・・

レイチェルが呆れる位、僕は今とっても・・・

幸せな状態です。

カンパニーの都合で、空いた4日間のおやすみを

「直ぐに行きなさい!」、

差し入れと渡してくれたお父さんからの航空券で大ちゃんは、僕の処に飛んできてくれた。

耐震構造で、建て替えになる僕らのマンションから、住み替えになった新しい部屋の鍵を持って愛しい人は、今、僕を抱き締める。

「今度の部屋は、仕事出来る部屋もあるぞ」、

そう言って笑う大ちゃんに

「じゃあ、俺が行っても泊まれるな!」、

Macが割り込んでくるから

「お前は絶対に入れない！」、

いつも冷静な大ちゃんが本気で戦っている。

「愛されてるね～K・・・」、

レイチェルが、ふわりと僕に近寄って

「今夜はお兄ちゃんに呼ばれてるから留守よ
ゆっくり、たっぷり愛し合っていていいからね」、

ニヤリと笑った。

そうだった・・・

レイチェルは、あのたまおDVDが大好きな
腐女子だった。

「セ・・・先輩には内緒にしてね・・・」、

そっと僕が願うと

「じゃあ、後で大輔と写真とってもいい？」、

僕は仕方なく、頷いた。

「食べ過ぎたな・・・」、

僕のポケットからするりと鍵を取り
出して、

カシャン！

僕の部屋の鍵を、貴方が開ける。

明日の朝にはいなくなるその背中に
ぎゅっとしがみつくと

「いつでもそばに居るからな・・・」、

振返って僕を抱き締めた貴方はゆっくり
僕の唇を塞いだ。

柔らかな日差しに、そっと目を開けた。

僕は、パジャマを着ていて

テーブルの上には、朝日に光る瓶が

ひとつ。

”また、ハチミツを買いに来るから”

綺麗な懐かしい文字が涙で滲む。

大ちゃんの買った大きな瓶がそこに。

僕の買った小さな瓶は、今頃飛行機の中に。

「愛してる・・・」、

その瓶のラベルに大きく掛かれたその文字を
いつまでも抱きしめた朝。

2度目の冬が静かにはじまった。

おわり。

2度目の冬。おまけのMac

「ちょっと、やめなさいよ！」、

さっきからMacは何度も何度も携帯を
タップしている。

「だって、今夜はジャパニーズ鍋だぞ！」、

そう言って隣のKに電話をかけているんだ。

「でも、ほらKだって久しぶりの再会でしょ
もう、ほらね・・・ナベどころじゃないと」、

さっきの箱を思い出して、Kがあんな事や
こんな事をされちゃってる姿を想像して

「何、赤くなってんの？」、

Macが不思議そうに見つめている。

「と、とにかくほら、邪魔しないの！」、

携帯を取り上げようとする

「あー！電源落とされた！」、

Macはガックリと肩を落とす。

うわ、やるわねKの彼氏さん・・・

あんなことや、こんなこと・・・

「って、何してんの?」、

今度は壁にコップを当ててMacはし～っと
指を立てた。

「・・・まさか・・・聞こえちゃうの?」、

ドキドキしながらMacの横にグラスを持って
並ぶと

・・・・・・・・ (//▽//)

「す・・・すげーな K・・・」、

Macが放心状態になっている。

「普段あんなに優しい顔してて、彼女を
あんなに泣かせちゃう位、獣だぞ!」、

確かにそうね、可愛い声が響いているけど

Mac . . .

貴方の素敵なお友達が、

愛する人に揺られている声なのよ . . .

言えない . . .

明日、一緒にこの街を案内してあげるって
張り切ってたMacに . . .

そのか弱い肩を抱き寄せる彼がいるなんて

そう思いながら、壁のガラスを離せない
レイチェルなのでした。

NYの恋人

<http://p.booklog.jp/book/102032>

著者 : palareru

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/palareru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102032>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102032>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ